

湯守のいる湯、「地・温泉」から

東北、湯を守り続ける人たち



冬の東北で、恵みの源泉を代々受け継ぐ湯守たちに出会う

東北の温泉場では古くから、農閑期になると近隣の人々がこぞって湯治にやってきた。大自然の山懐に抱かれた源泉は、時が移ってもなお、しんと音のない雪景色の中で、絶え間なく湧き続けている。

そこに共にいるのは、かけがえない源泉を守る湯守たち。先祖から、そして親から子へ、受け継ぐ伝統を重んじながら、時代に合わせた湯宿のありようを大切にしつつ、訪れる人を待っている。

取材文／龍門沙良々 撮影／樋口政治・坂本政十賜

秋田県 乳頭温泉郷
鶴の湯温泉

佐藤大志さん



秋田県 後生掛温泉
後生掛温泉旅館

阿部愛恵さん



岩手県 鉛温泉
岩三旅館

藤井大斗さん



山形県 白布温泉
東屋旅館

宍戸紘次郎さん



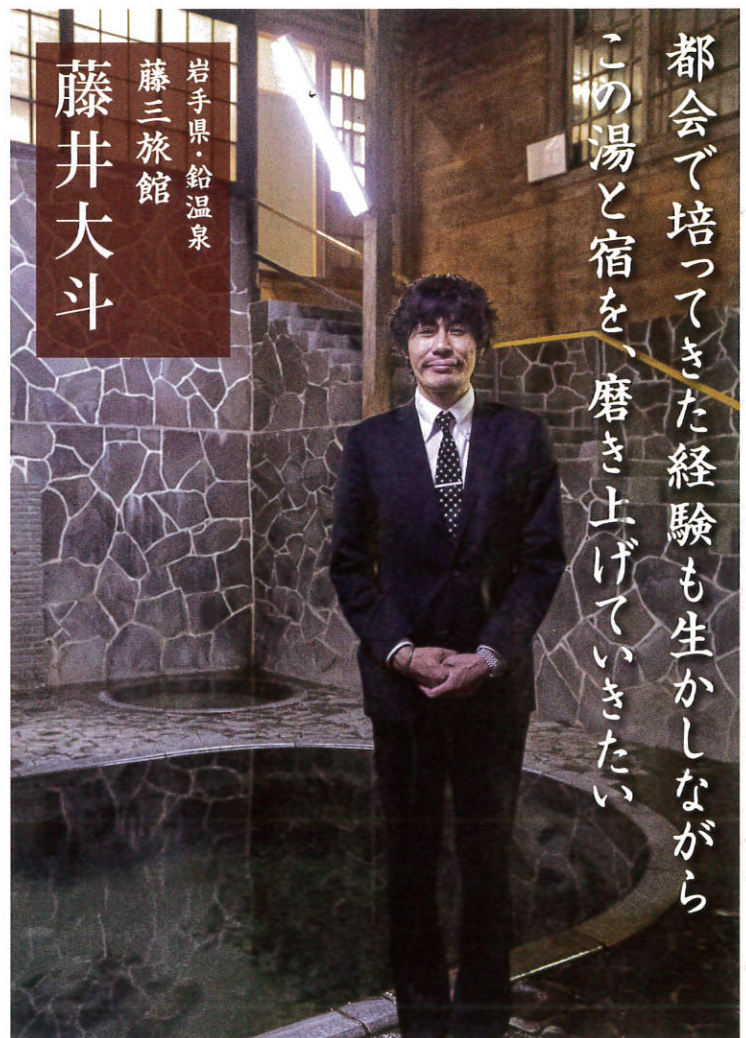
身も心も癒やされる
深い自噴天然岩風呂

約600年の歴史を持つ古湯、鉛温泉の藤三旅館。13代目湯守の藤井大斗さんは「この温泉は、宮沢賢治の童話『なめとこ山の熊』に、腹の痛いのも傷も治る湯として登場しますし、田宮虎彦の『銀心中』の舞台にもなっています。田宮さんは1カ月ぐらい滞在して作品を書き上げたと言っています」と宿の歴史を語る。

名物の「白猿の湯」は、湯船の底で源泉が自噴する天然の岩風呂。深さは約125cmもある。藤井さんは「立ったままつかることで、全身にまんべんなく湯圧がかかり、循環器系などにいいとされています」と話す。実際に入ってみると、思ったよりも深く、足元がごつごつして刺激になりそうだ。だが、じつとつかっている、と、全身にお湯の恵みを感じ、高い位置にある窓からさしこむ光が気持ち落ち着かせてくれる。

新しい感覚も取り入れつつ 守り続ける湯の伝統

藤井さんは41歳。東京でアパレル関係の仕事をしていただけあって、雑誌のページから抜け出してきたようなお



都会で培ってきた経験も生かしながら
この湯と宿を、磨き上げていきたい

岩手県・鉛温泉
藤三旅館
藤井大斗

しゃれな雰囲気を持ち主だ。奥羽山脈中の一軒宿の主のイメージではない。藤井さんは「古い宿の風景から浮いていると、言われることも多いです」と笑いながらも、「宿もアパレルもお客さまの満足を考えるという点では同じ。東京での経験は役立っていますね。これからも、愚直に正直にお客さまに接していくことで、この宿をずっと守っていききたい」と表情を引き締める。現在は旅館部と湯治部があり、「湯治部は藤三旅館の基礎だから、将来も残したい。その上で新しい試みに挑

戦するのも重要」。藤井さんのこれまでの経験が、高級志向のお客さまの満足を意識した客室数の少ない別邸「十三月」でも存分に生かされている。若女将の絵理子さんは、服飾専門学校時代の後輩。東京育ちだが「自然が大好きで、ここに来るのはうれしかったです。最初は雪深さに慣れるのが大変でしたけど」とのこと。古い旅館を継いだ大斗さんと都会のセンスを共有する絵理子さん。宝である源泉は、本物中の本物。だから、真つ正直にお湯を守り続けていく。

名物風呂「白猿の湯」は、180cmを超える長身の藤井さんでも胸に届くほどの深さ



1 雪景色に木造3階建て総ケヤキ造りの本館から暖かな明かりが漏れ、幻想的な雰囲気が漂う
2 減農薬で栽培された地物の野菜や三陸の海の幸など、旬の食材で作られた料理が並ぶ夕食。スタッフが説明してくれる